開業1年

宇都宮LRT ①

通勤「大口固定客」つかむ

沿線にホンダ

宇都宮市と栃木県芳賀町を結ぶ次世代型路面電車、芳賀・宇都宮LRT（ライトライン）が2023年8月26日の開業から1年を迎える。累計乗客数は9月に500万人に届きそうで地域の足に急成長した。勢いに乗りJR宇都宮駅西側への延伸や中心街活性化など、LRTを軸とした街づくりは新たな段階に移る。

ライトラインの快進撃が止まらない。1周年イベントを開く25日時点で累計乗客数は約480万人を見込む。土休日が1日約1万人と想定の2倍に達するが、それ以上に平日の伸びが見逃せない。1週間に5日ある平日の乗客獲得は鉄道経営の根幹をなす。土日の買い物・行楽客は「浮動票」、平日の通勤通学客は「組織票」だ。

平日の乗客数は開業直後に1日1万2000人だった。今春から電車通勤を始めた社会人や学生も多く、現在は1万5000～1万8000人。3年目に約1万6000人という目標を早くもクリアした。

4月に快速を投入したのに続き、7月には混雑する朝夕の時間帯に増発。開業から1年で3回も増発のダイヤ改正に踏み切った。

平日夜8時過ぎ、清原工業団地内にある停留場から宇都宮駅東口に向かう上り電車に乗った。50人分の座席はすべて埋まり、ドア付近に立つ客も

いて混み合っていた。

乗客は宇都宮大学陽東キャンパスから停留場に止まるたびに10人程度が降り、終点の宇都宮駅東口に着くころには混雑は解消されていた。

反対に平日朝、宇都宮駅東口を出発する下り電車（各駅停車）に乗ると、停留場に止まるごとに数人から10人程度が乗車し、車両基地のある平石方面へ向かう大混雑。清原地区市民センター前から徐々に降りていく。

通勤通学客への定着は

北関東

こだま

水戸に宿泊を、市長も一役

茨城県の県央版が水戸市や隣接する茨城町で配布され、ウェブ上でも誌面で見ることができる「月刊ふらっと・ぷらざ」という無料のタウン誌がある。

この7月号の表紙に水戸市の高橋靖市長が登場した。表紙に県内の自治体トップが掲載されるのは初めてではないのだが、話題になったのは、写真の配置が少し特徴的だったからだ。

ウイスキーグラスを片手に笑顔を見せる市長の写真を真ん中に置き、周りを市内のいわゆる「飲み屋」の関係者が取り囲んでいる。内側のページでは市長の街づくりに関する談話を中心にした特集記事も掲載された。

「写真を撮ったのは日中。グラスの中身はウーロン茶で、『芝居』まで買って出たのは、大きなコンサートや会議を誘致する受け皿にしようと昨年7月に開館した新しい市民会館の周囲にある街をPRし、にぎわいを波及させたいという思いからだった。

市長は市民会館からほど近い「泉町」「大工町」という飲食街に県内外から人々が訪れて活気を増せば、水戸で泊まっていく人が増え、観光振興に弾みがつくと期待している。ほかの著名な地方都市で例えるなら、札幌の「すすきの」や福岡（博多）の「中洲」のような街の話だと思ってもらうといい。

茨城県は東京圏から距離が近いため日帰りの行楽先になりやすく、宿泊を呼び込む知名度の高いリゾート地も少ない。観光庁が公表する年間延べ宿泊者数は2023年に750万人泊だった。関東7都県では、埼玉に次いで2番目に少ない。

「泊まりがけの観光客を増やしたい」。そうした問題意識を持ち、行動するのは高橋市長だけではない。

「夜の街」をPRして宿泊需要を喚起しようという同じ視点で、水戸観光コンベンション協会は今年2～3月、スナックアイーナツアーin大工町」を実施した。偕楽園などを会場にした年に一度の「水戸の梅まつり」が開催され、県内外から多くの観光客が水戸を訪れる時期に合わせ、1人8500円でスナックを2軒、いわゆる「はしご」ができる企画にした。

茨城県で宿泊客が少ないのは、魅力的な「当地料理があまりないのも要因の一つとされる。なら焼新たなご当地グルメを生み出そうと大井川和彦知事が発案し、10月に開催するご当地グルメフェス「シン・いばらきメシ総選挙2024」も、宿泊需要の喚起策と位置づけられる。

首長らが旗を振るにぎわいづくりの取り組みが功を奏すか。地元の飲食街に日ごろ足を運ぶ機会がある我々にとっても楽しみな話である。

（水戸支局長　岩崎樹生）

水戸市の高橋市長は街のにぎわいづくりに貢献しようと、飲食店関係者とともにタウン誌の表紙に登場した